



大学間発達障害支援ネットワークの構築と 幼保専門職業人の養成

発達障害児への指導援助のできる保育士・教師養成に関する 「大学コンソーシアム佐賀の取り組み」

大学コンソーシアム佐賀大学間連携共同教育推進事業 事業推進責任者

佐賀大学 文化教育学部教授 園田 貴章



「大学間発達障害支援ネットワークの構築と幼保専門職業人の養成」

教育の専門性を高めるための大学間連携共同教育について

1. アンケート調査の結果報告 ー社会的ニーズと事業の目的ー
2. 本事業の概要、大学コンソーシアム佐賀の説明
3. 大学間共通教育プログラムと子ども発達支援士
4. 養成プログラムの内容・実績
5. 大学間発達障害支援ネットワークの構築と活用
6. 今後の展開・目標





佐賀県内の幼稚園・保育所等を対象とした 「発達障害の可能性のある幼児」に関するアンケート調査

【目的】 佐賀県内の幼稚園・保育所等における発達障害の可能性のある子どもへの支援の現状や、支援に必要とされる幼稚園教諭・保育士の資質や能力等を明らかにする

【対象】 佐賀県の幼稚園、保育所、計378施設の管理職及び担任

【期間】 平成25年9月～11月

【回収率】 152施設（40.2%） 管理職…152名、担任…879名

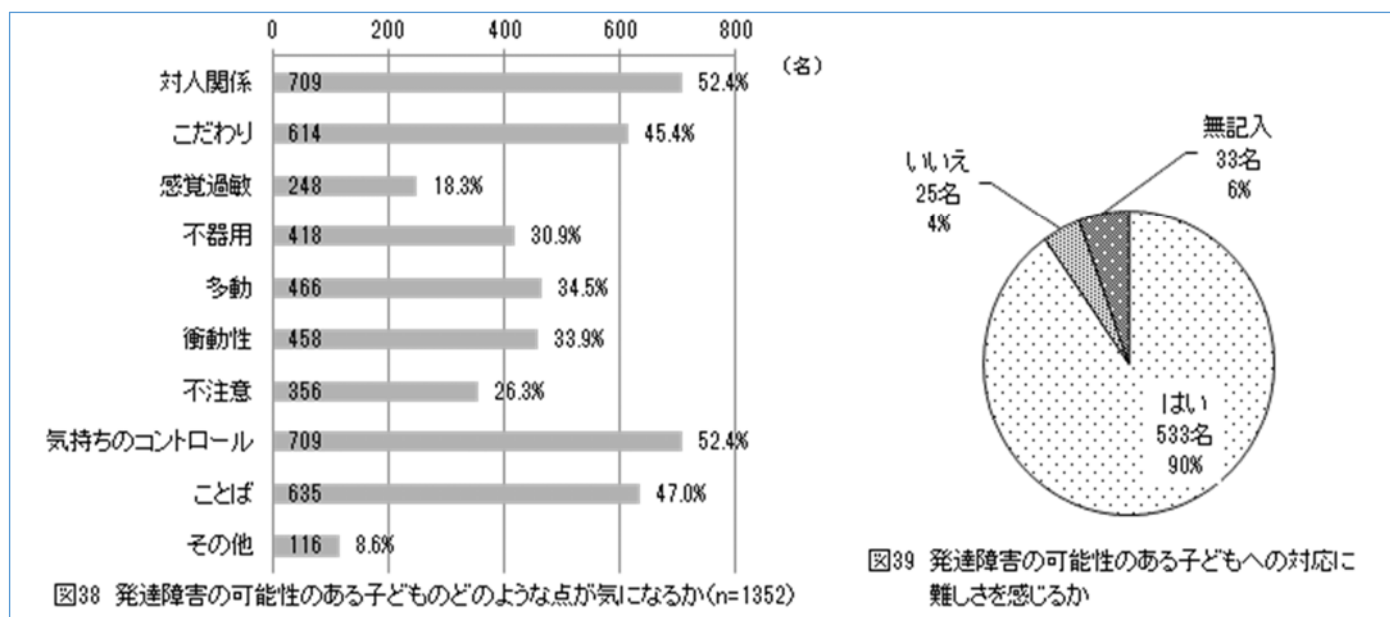
→ 平成26年7月に、9つの園に聞き取り調査実施

（幼稚園2園、保育所2園、認定こども園3園、認証保育施設1園）



佐賀県内の幼稚園・保育所等を対象とした 「発達障害の可能性のある幼児」に関するアンケート調査

【担任】Ⅱ-b. どのような点が気になりますか。最大5名について、当てはまるものすべてに○をつけてください。



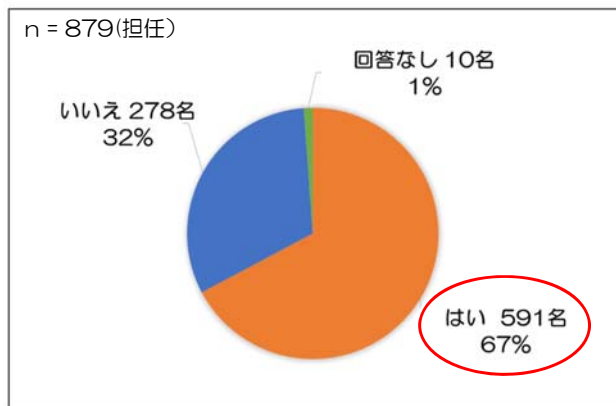
※アンケート調査報告書はHP上で公表しています。 <http://www.saga-cu.jp/khs/index.html>



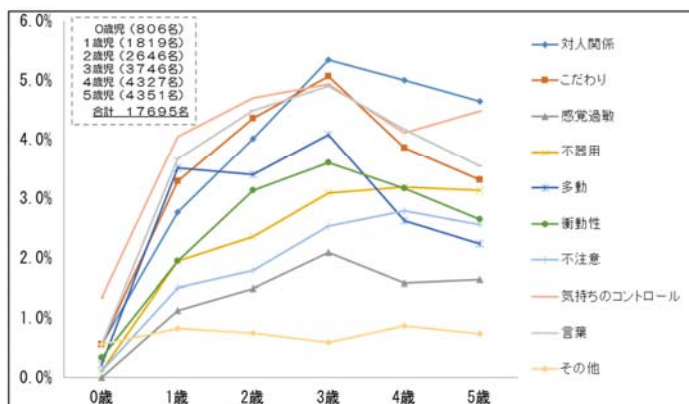


佐賀県内の幼稚園・保育所等を対象とした 「発達障害の可能性のある幼児」に関するアンケート調査

発達障害の可能性のある子どもを担当しているか



担任が行動等の面で気になっている子どもの
各年齢における割合



対人関係など、本人や周囲の発達に伴い顕在化する点もあるが
多くの場合、可能性のある幼児の特徴は、早期から気づかれている

※アンケート調査報告書はHP上で公表しています。 <http://www.saga-cu.jp/khs/index.html>



佐賀県内の幼稚園・保育所等を対象とした 「発達障害の可能性のある幼児」に関するアンケート調査

【管理職】Ⅲ-k. 発達障害の可能性のある子どもへの対応について困難に
感じた事例があれば、可能な範囲で結構ですので、具体的にお書きください。

保護者
への;
保護者
との

表2 管理職の子ども対応における困難
(n=88)

回答率順位	回答率
1 伝達・連携	42.0%
2 地域の連携	30.7%
3 家族・家庭	23.9%
4 集団への適応	15.9%
5 園運営	14.8%
6 (対応方法)その他	11.4%
7 対応力	10.2%
8 他児への対応	9.1%
9 アセスメント力	6.8%
10 コミュニケーション	5.7%
10 衝動性への対応	5.7%
12 その他	4.5%

回答率順位	回答率
13 (学級運営)その他	3.4%
13 (保護者対応)その他	3.4%
13 パニック	3.4%
13 園対応	3.4%
13 発達障害の知識	3.4%
13 保育環境構成	3.4%
19 こだわり	2.3%
20 感覚過敏	1.1%
20 実践	1.1%
20 職員間の連携	1.1%
20 多動	1.1%
20 対人関係	1.1%



佐賀県内の幼稚園・保育所等を対象とした 「発達障害の可能性のある幼児」に関するアンケート調査

【管理職】Ⅲ-b. 現在または過去に、発達障害の可能性のある子どものために教諭・保育士を追加採用したことがありますか。その際、公的な補助金を利用しましたか。

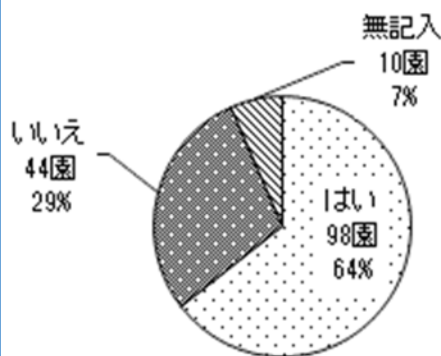


図23 支援のための教諭・保育士の追加採用をしたか

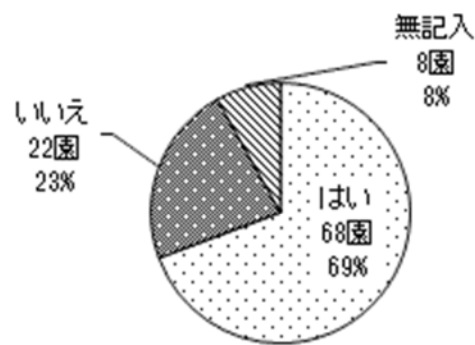


図24 追加採用した際に公的な補助金利用をしたか

※アンケート調査報告書はHP上で公表しています。 <http://www.saga-cu.jp/khs/index.html>



佐賀県内の幼稚園・保育所等を対象としたアンケート調査結果から

現職保育者が求める研修内容

全ての層(新採・中堅・ベテラン)の保育者に必要な研修内容

子どもと積極的に関わる。個人情報適切に扱う。同僚保育者と協働する。
発達障害の特性に関する知識。保護者対応。

経験の短い保育者に必要な研修内容

コミュニケーション。保育環境の構成。

経験の長い保育者に必要な研修内容

福祉制度に関する理解。周囲の子ども達に障害の理解や関わりを促す。

基礎的な知識に加えて必要な研修内容

支援・指導計画の作成。小学校や専門機関との連携。





社会的ニーズと本事業の目的

アンケート調査の結果に加え・・・

- * 佐賀県A市の3歳児健診後の要フォロー幼児の割合
→ 最近5年間24%から30%に増加
- * 文部科学省調査報告(平成24年12月)
→ 発達障害の可能性のある小・中学生は6.5%
- * 「思い通りにいかないと叩く子どもは以前もいたが、
一度、かんしゃくを起こすと切り替えのきかない子どもが増えていることを実感している。」(聞き取り調査より)



社会的ニーズと本事業の目的

アンケート調査の結果に加え・・・

- * 佐賀県A市の3歳児健診後の要フォロー幼児の割合
→ 最近5年間24%から30%に増加
- * 文部科学省調査報告(平成24年12月)
→ 発達障害の可能性のある小・中学生は6.5%
- * 「思い通りにいかないと叩く子どもは以前もいたが、
一度、かんしゃくを起こすと切り替えのきかない子どもが増えていることを実感している。」(聞き取り調査より)



社会的ニーズと本事業の目的

本事業の目的

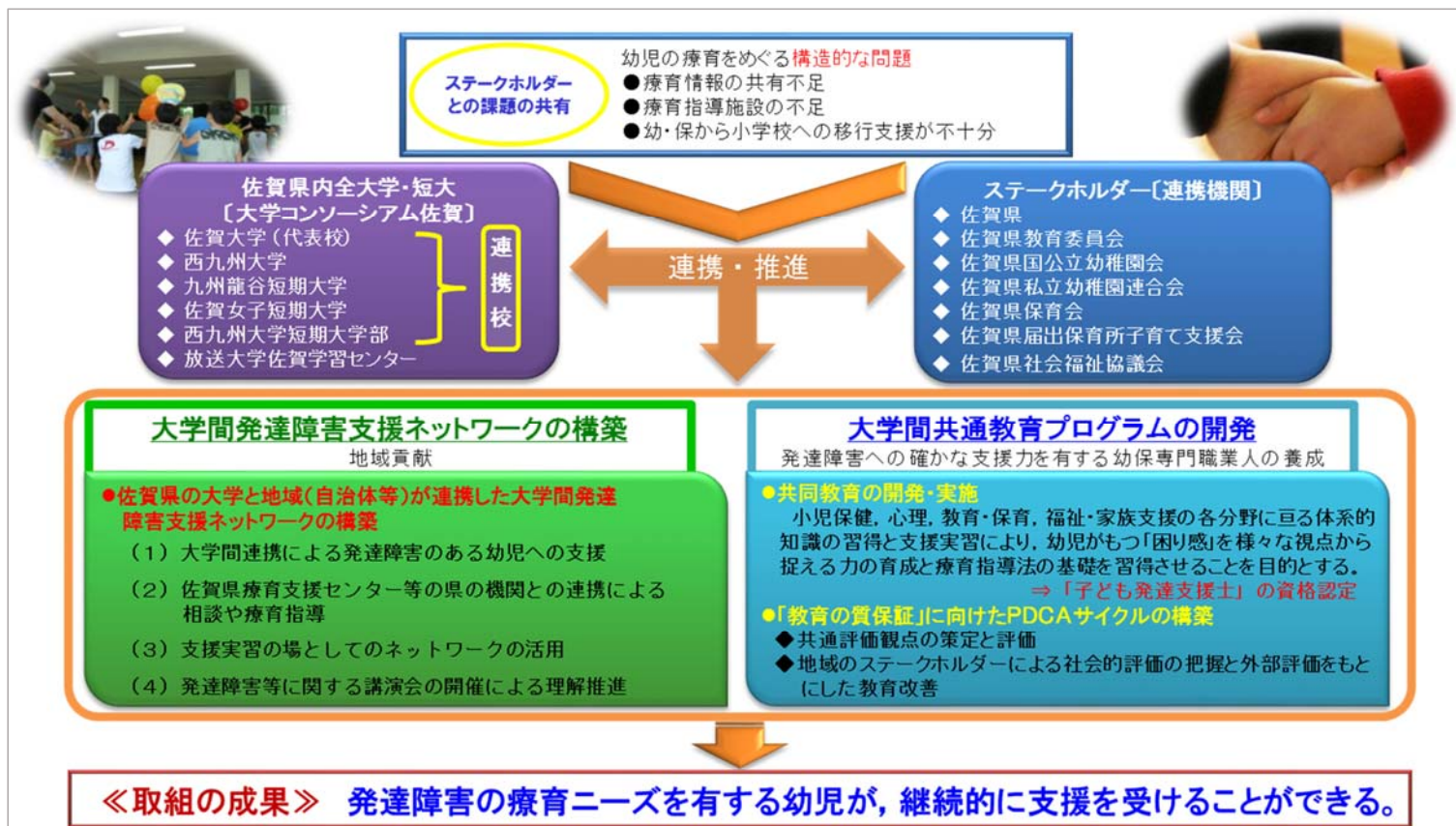
より多くの発達障害のある幼児（その可能性のある幼児も含めて）が、ニーズにあった支援を幼稚園や保育所で受けられることを目指す。

その後の小・中・高・大学・社会人生活を送る上で
幼児期の支援は極めて重要



「大学間発達障害支援ネットワークの構築と幼保専門職業人の養成」

取組概要





大学コンソーシアム佐賀の構成大学 → 佐賀県内のすべての高等教育機関



2007年12月設立

四年制大学・・・2

短期大学・・・3

放送大学・・・1



本事業の実施体制

支援期間

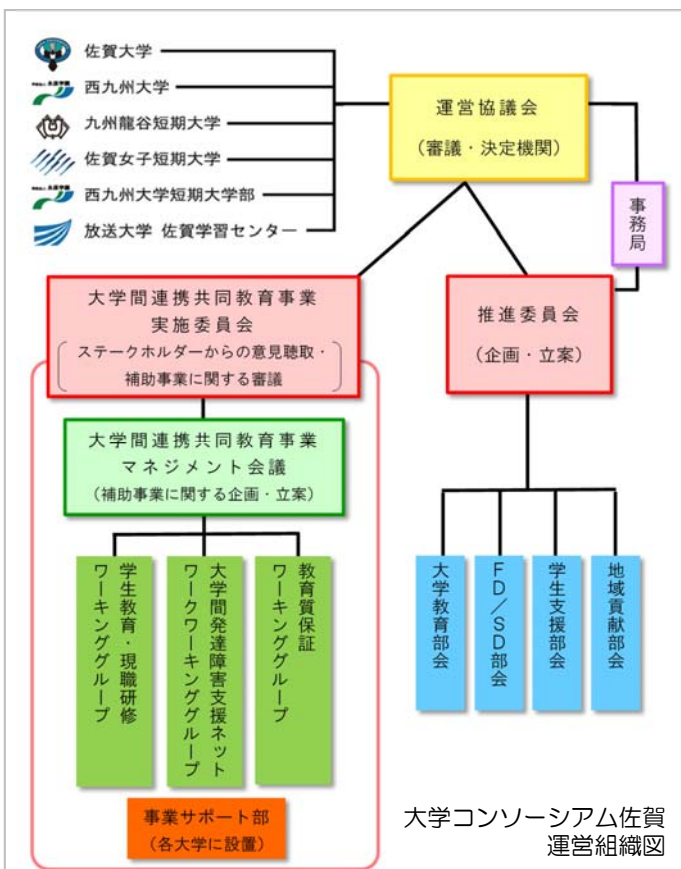
平成24年度～平成28年度（5年間）

連携機関

佐賀県
佐賀県教育委員会
佐賀県国公立幼稚園会
佐賀県私立幼稚園連合会
佐賀県保育会
佐賀県届出保育所子育て支援会
佐賀県社会福祉協議会

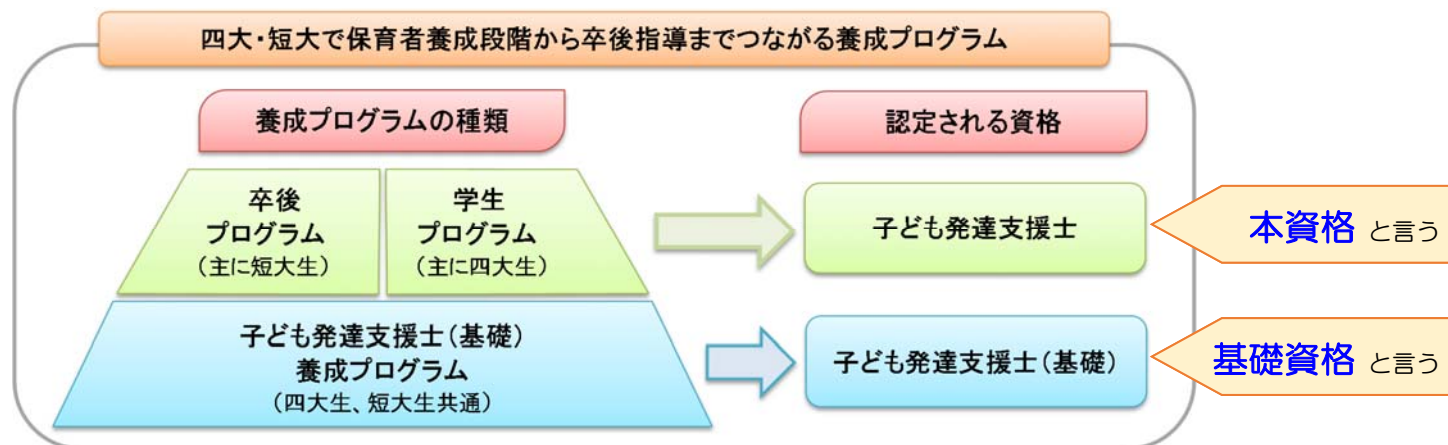
外部評価の実施

第1回 → 平成26年10月～12月実施
第2回 → 平成28年度に実施予定





子ども発達支援士養成プログラムの構成



子ども発達支援士の定義

子ども発達支援士は、幼稚園、保育所、小学校等に関する免許・資格を有する方で、子どもの成長・発達に関する知識や技術の学修をもとに、**発達障害等のある幼児の困り感に気づき、子どもによりそった支援ができ、また保護者を支援できる方**に対して、大学コンソーシアム佐賀が認定する資格。



子ども発達支援士の到達目標

		到達目標
態度・意欲		- 発達障害等のある幼児について基本的に理解することができる。 - 支援に対して意欲と使命感を持つことができる。
支援力		【子ども発達支援士(基礎)】 発達障害等のある幼児の困り感に気づき、支援方法を考えることができる。 【子ども発達支援士】 指導計画等を作成し、子どもを支援し、そして、保護者の気持ちを理解できる。
学修	小児保健	発達障害等のある幼児の身体的発育について説明することができる。
	心理	発達障害等のある幼児の心理特性について説明することができる。
	教育・保育	発達障害等のある幼児の教育や保育の概要を説明することができる。
	福祉・家族支援	発達障害等のある幼児をとりまく家庭・社会環境について説明することができる。

期待される能力や態度を明示



大学間共通評価観点の設定

【子ども発達支援士（基礎）】

	共通評価観点		科目に含める具体的内容	
基礎	1	発達障害について自ら学んでいく力	1-1	子ども理解
	2	発達障害のある子どもと積極的に関わろうとする力	2-1	支援者としての自覚や使命感
小児保健	3	発達障害の特性に配慮した健康の保持及び安全についての理解	2-2	発達障害等のある子どもへの支援に対する意欲
			3-1	子どもの身体発達と発達障害
			3-2	子どもの病気
心理	4	発達障害のある子どもの行動と心理についての理解	3-3	環境と子どもの健康の関係及び安全
			4-1	子どもの心の発達過程と心の問題
			4-2	発達障害等、障害のある子どもの特性
教育・保育	5	発達障害のある子どもの障害特性に配慮した教育・保育方法の理解	4-3	発達・心理検査の概要
			5-1	特別支援教育の目的や意義
			5-2	子どもの不適応行動の改善のための指導
福祉・家族支援	6	発達障害に関する福祉制度や福祉サービスについての理解	5-3	子どもの社会性形成のための指導
			6-1	児童福祉に関する制度やサービス
			6-2	発達に課題のある子どもや家族の困難やニーズ
子どもに対する支援力	7	発達障害のある子どもの特性に配慮したコミュニケーション力	6-3	幼児・児童虐待などの問題
			7-1	子どもとの信頼関係
			8-1	見通しを持つことができ、気持ちを切り替えやすい環境
チームとしての支援力	8	発達障害のある子どもの特性に合わせて、環境を構成する力	9-1	子どものニーズや特性に配慮した支援（遊び等を含む）
			10-1	支援実習の記録を記入
			10-2	レフレクションレポートを作成
倫理	12	発達障害のある子どもの個人情報を通切に扱う力	11-1	チームメンバーと協力する
			11-2	チームメンバーに自分の考えや意見を伝えたり、他のメンバーの考えに学んだりする
			11-3	チームの中や実習先で保護者と協働しながら、自分の役割を自覚する

【子ども発達支援士】

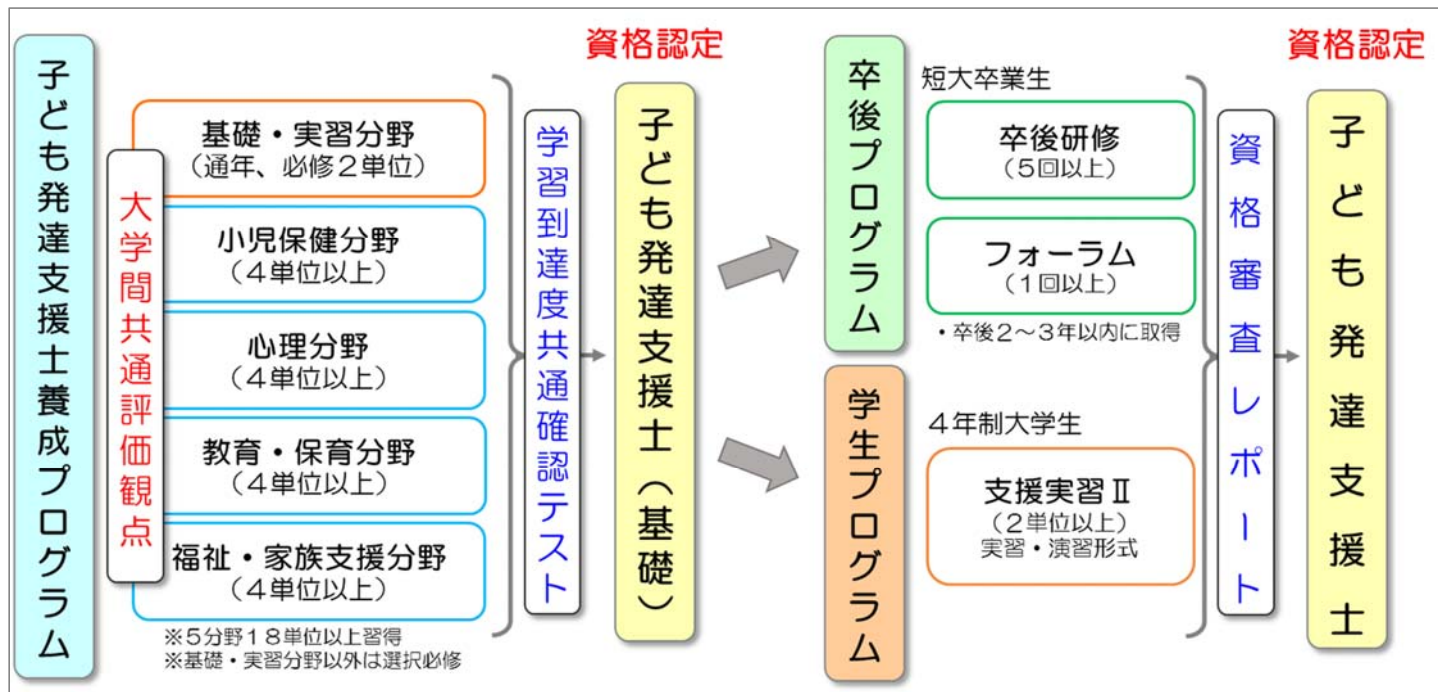
	共通評価観点		科目に含める具体的内容	
子どもに対する支援力	13	発達障害のある子どもと周囲との関係調整力	13-1	子どものニーズにあった支援方法
	14	発達障害のある子どもの保護者の思いを理解する力	14-1	保護者の思いや立場、状況を理解する
保護者に対する支援力	15	発達障害のある子どもの保護者と情報交換を行う力	15-1	保護者に支援の内容やその結果を適切に報告する
	16	発達障害のある子どもの発達状況や集団生活から課題を見つけ、対応する力	16-1	子どもの状況から、「困り感」や支援ニーズについて考える
幼稚園等に 対する支援力	17	他機関との連携を把握する力	16-2	支援目標と子どものニーズとの関係を理解する
			17-1	支援のための連携機関を想定する
指導計画の作成力	18	個別の指導計画を作成する力	18-1	指導のねらいを立て、課題を設定し、教材を工夫し、評価の視点を設定し、支援の結果を考察する

平成25年度：アンケート調査の結果を受け、**見直し**

開講科目・実習内容に反映
学修状況の評価に活用



養成プログラムの流れ





養成プログラム受講者数

大学名	平成25年度	平成26年度	主な所属学部・学科等
佐賀大学	34名	18名	文化教育学部学校教育課程
西九州大学	157名	42名	子ども学部 健康福祉学部
九州龍谷短期大学	37名	30名	保育学科
佐賀女子短期大学	106名	46名	こども学科 キャリアデザイン学科(養護教諭系) 専攻科こども学専攻
西九州大学短期大学部	44名	14名	幼児保育学科 専攻科保育福祉専攻
合計	378名※	150名	—

※ 平成25年度はプログラム初年度により、複数の学年の学生が受講



基礎・実習分野

「子どもの支援Ⅰ（基礎・実習）」

- ・ 連携校共同開講科目（必修、通年開講）
- ・ 基礎ユニット（前・後学期2回の集中講義）
- ・ 支援実習Ⅰ（30時間以上の実習）

その他4分野

⇒ 79科目（各連携校で開講） ※平成26年度

* 小児保健分野 ⇒ 18科目
* 教育・保育分野 ⇒ 24科目

* 心理分野 ⇒ 18科目
* 福祉・家族支援分野 ⇒ 18科目



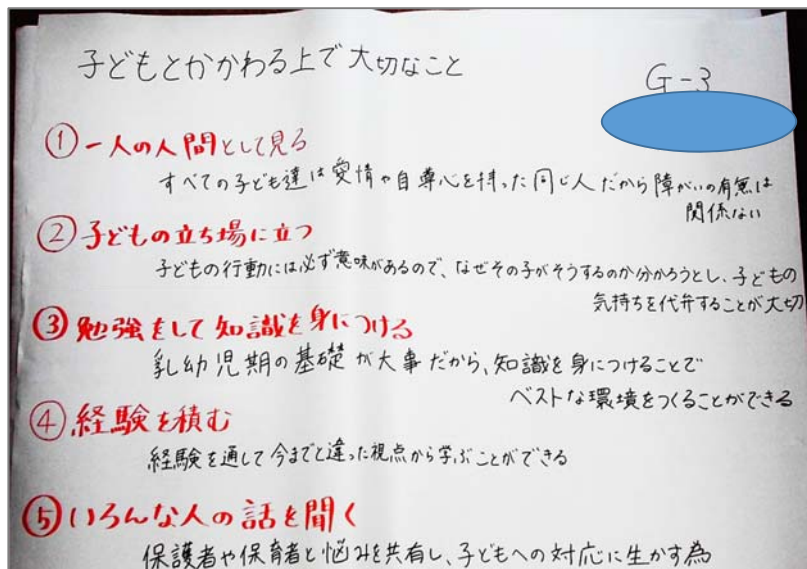


基礎ユニット（集中講義）

「子どもの支援Ⅰ（基礎・実習）」

* 前半基礎ユニット《平成26年5月18日（日）》

午前 連携校教員による講義「保育園での指導」「発達障害の基礎知識」
午後 グループワーク「子ども達にかかわる上でたいせつなこと」



基礎ユニット（集中講義）

「子どもの支援Ⅰ（基礎・実習）」

前半基礎ユニットを終えて～ある学生のワークシート抜粋～

4. グループで話し合っ、あなたが考えたこと

今回、子どもについて学びたいと意志も同じくする人々とグループを作って話し合い、さらにそれは大学を超えた仲間であったという機会が得られたことはとても新鮮でした。みんな私と同じように初めての試みで不安や心配も少しはあるというところが感じられました。みんな将来は子どもに関わりのある仕事がいいという思いがあったので、共に成長していきたいと改めて強く思いました。将来子どもと関わる際に、どうしたら子どもが安心して学べる環境を整えてあげられるかを、学生としての立場ではなく、教師の立場として考えることが自然にできるようになるように、努力していきたいと思っております。



基礎ユニット（集中講義）

「子どもの支援Ⅰ（基礎・実習）」

* 後半基礎ユニット《平成26年12月23日（火）》

午前 外部講師による講義 ①「親が期待する家族支援」保護者の方
②「発達障害と共に生きる」当事者の方
午後 グループワーク「支援実習Ⅰを通して学んだこと
これからやってみたいこと」



テーマ: 実習を通して学んだこと、
これからやってみたいこと

D-1

実習を通して学んだこと

1. 子どもとのコミュニケーションのとり方
理由: 自分から積極的にコミュニケーションをとることによって心を開いてくれたから。
2. 子どもとかわる前の事前準備
理由: 事前準備の大切さを学んだから。
3. トラブルが起きた時の対処法
理由: 先生の対処法を見て接し方を学んだから。

これからやってみたいこと

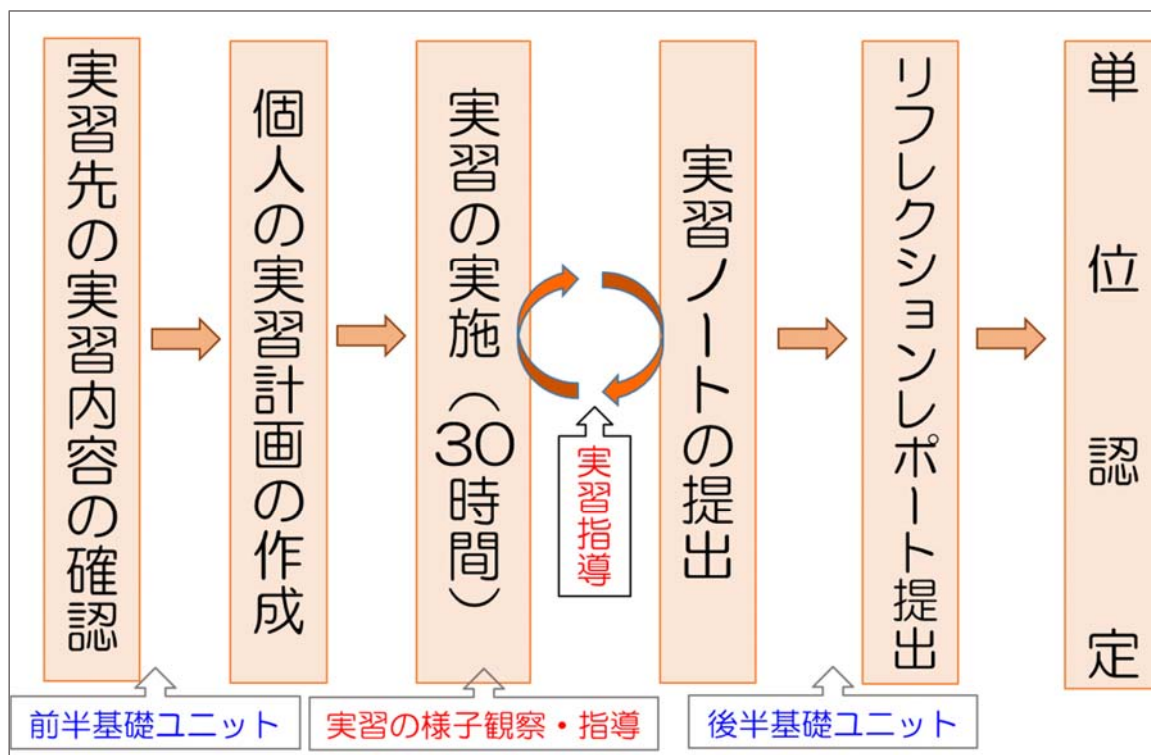
1. しっかりと事前準備を行う
理由: 子どもたちに適切に関わるため
2. 適切な声かけを行う
理由: 子どもたちを尊重した声かけをしたいから。

2014年12月23日



支援実習Ⅰのプロセス

「子どもの支援Ⅰ（基礎・実習）」





支援実習Ⅰの実習先

*実習先一覧（H26）

No.	実 習 先	担当大学
1	のびるーム	佐賀大学
2	ウルトラマンクラブ	
3	放課後児童クラブ	
4	佐賀大学文化教育学部附属幼稚園保育参加	
5	大和特別支援学校ボランティア養成講座	
6	佐賀県療育支援センター行事ボランティア	
7	佐賀県療育支援センター春日園での余暇支援	
8	第38回佐賀県自閉症児・者療育キャンプ	
9	日の隈キッズ	西九州大学
10	学校訓練会	
11	佐賀心理リハビリテーションキャンプ	
12	佐賀心理リハビリテーション訓練会	
13	鳥栖心理リハビリテーション訓練会	九州龍谷大学
14	久留米市幼児教育研究所ボブラ学級1日ボブラ	
15	久留米市幼児教育研究所ボブラ学級託児	
16	放課後児童クラブゆう	
17	NPO法人しょうがい生活支援の会すみか動作訓練	
18	NPO法人しょうがい生活支援の会すみか外出活動	
19	NPO法人しょうがい生活支援の会すみか放課後等デイサービス事業	
20	療育室きらり	佐賀女子短期大学
21	臨床保育室「おひさま」相談事業	
22	佐賀女子短期大学附属認定こども園現場支援実習	
23	佐賀市手をつなぐ育成会子ども部「笑育舎」	
24	NPO法人セルフ（夏休み教室と季節イベント）	西九州大学短期大学部
25	わくわくワーク（知的障害児サークル）	
26	ぽっぽ	
27	NCN研究大会	

「子どもの支援Ⅰ（基礎・実習）」

*実習概要（例）

実習名	〇〇センター ンティア	担当大学 (担当者)	佐賀大学
開催予定時期	〇月 〇日（日） 9～14時 〇月 〇日（日） 9～13時 〇月 〇日（土） 8時半～15時	時間数	5時間 4時間 6時間半
受け入れ人数	活動ごとに後日決定	場所	△△
実習できる内容	担当の子どもと一緒に活動したり、運営をサポートしたりするなかで、個別支援を実践することができる。またボランティア養成講座に登録することにより、センター内の理学療法士及び心理判定員による講座を受講したり、実習外の行事に参加したりすることができる。		
活動スケジュール	〇月 〇日（日） スポーツレクリエーション ・園周辺のウォークラリーを行う。（雨天時は園内） ・チェックポイント担当や、園児の支援担当などに分かれて活動する。 ・活動終了後、センター紹介とボランティアについての説明会を行う。 〇月 〇日（日） ふれあい秋祭り ・屋台やアトラクションの担当、園児の支援担当などに分かれて活動する。 〇月 〇日（土） ふれあいフェスタ ・運動会の各係を担当する。 ※昼食提供		
準備物	動きやすい服装、上靴、筆記用具、ファイル、その他（活動ごとに指定）		



支援実習Ⅰ 参加状況（H25）

「子どもの支援Ⅰ（基礎・実習）」

連携校以外の施設等への実習参加状況

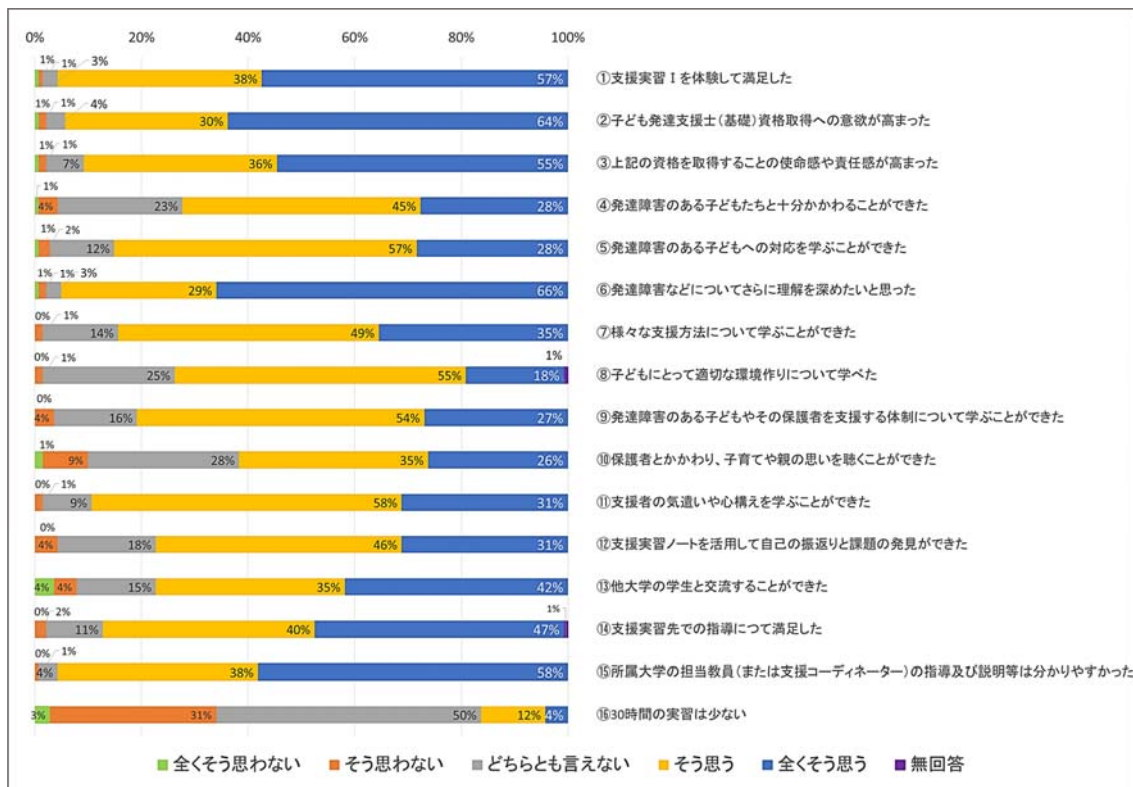
実習先	のべ参加者数	のべ実習時間
佐賀県療育支援センター	192名	670時間
大和特別支援学校 ボランティア養成講座	109名	1956時間
自閉症児・者療育キャンプ	28名	695時間
佐賀市放課後児童クラブ	231名	601時間
佐賀市手をつなぐ育成会 子ども部「笑育舎」	66名	311時間





支援実習Ⅰに関するアンケート調査

H26実習生：141名の回答



支援実習Ⅰに関するアンケート調査

H26実習生：141名の回答

～学生の記述抜粋～

学んだ
ことや
印象に
残った
支援方法

・5才の女の子に「おねえちゃん、もうくるなー!!」と言われ、少しうろたえていた時、職員の方が「気にしないでください。あれがあの子だけの表現の仕方なんです。」とアドバイスをいただいた。園児の自己表現、要求手段は様々だということを感じた。

学んだ
ことや
印象に
残った
支援方法

午前中に落ちついて過ごしていた女の子が午後になると「イライラする…」とずっと言っていた。職員の方は「〇〇ちゃん、たまに不安を感じて、あのようになることがある。少し声をかけてあげて。」とおっしゃった。「大丈夫？」と声をかけると、だんだんと笑顔になってくれた。



支援実習Ⅰに関するアンケート調査

H26実習生：141名の回答

～学生の記述抜粋～

学んだことや印象に残った支援方法	動作法のお手伝いをする際、一つひとつ必ず声をかける。「肩に触れますよ」「少し力を入れますね」等。突然触れられることで驚いたりパニックになったりする。おもしろいので、声かけは大切。印象に残ったことは、男の子が突然ピアノの方へ走り出して「ガーン!!」と大音量で鍵盤を叩いたこと。男の子は少し興奮していた様子で、担当の先生は普通の子と同じようにしかっていった。周りの子に悪影響を及ぼすかと思っただが、意外にも皆平然としていた。後、先生はその男の子に弾き語りをして「ピアノはこうやって優しく弾くんだよ」と教えていて、男の子が真剣にピアノを聴いている様子を見て、やはり私は音楽を通して特別支援教育に携わりたいと強く思った。
------------------	---



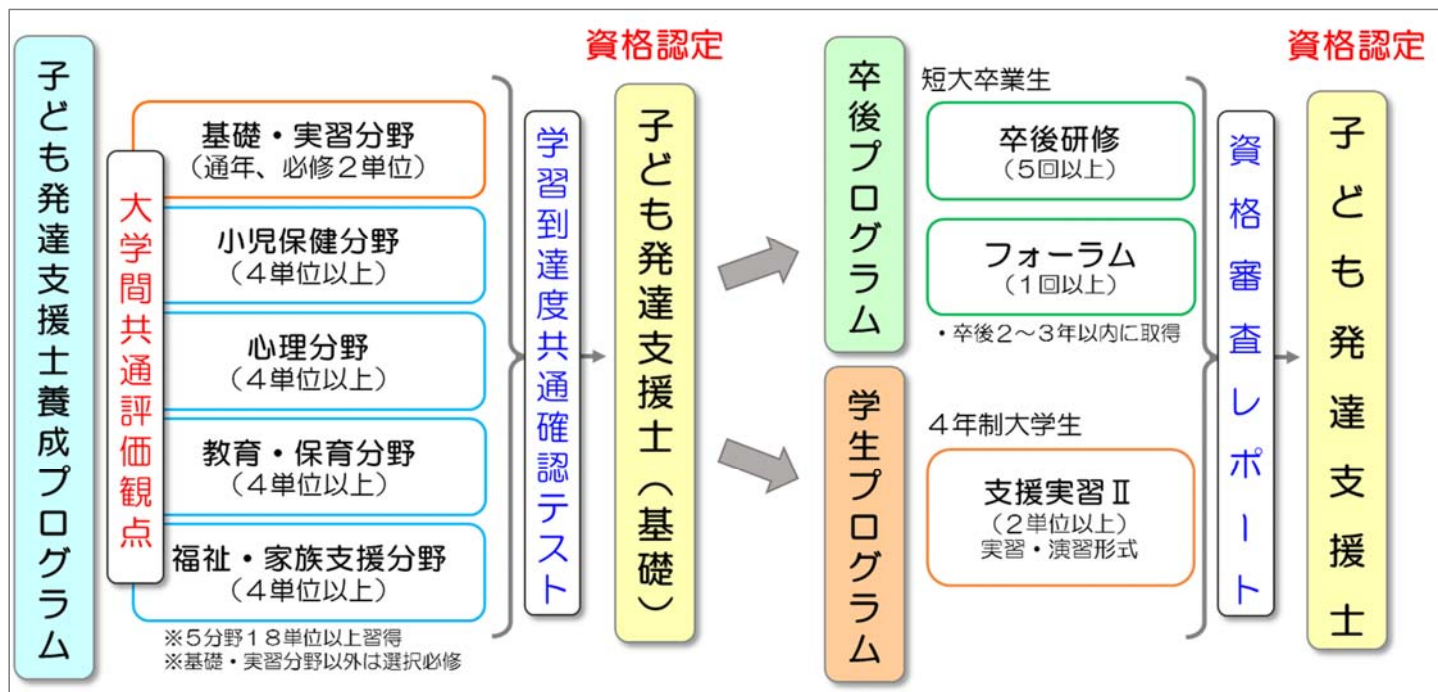
支援実習Ⅰに関するアンケート調査

H26実習先：11施設の回答

項目	非常に満足	満足	どちらとも言えない	不満	非常に不満
①実習を行う上で必要となる基礎的な知識の事前学習について		3	7	1	
②実習生から連絡や誓約書等の提出について		8	2	1	
③実習生の利用児・者や職員等に対する態度やマナーについて		10	1		
④実習生の利用児・者への安全管理の配慮について		8	2	1	
⑤実習生の利用児・者への関わりの積極性について		6	5		
⑥実習生の活動に関する責任感について		8	2	1	
⑦実習生の職員等に対する質問について		5	3	3	
⑧実習生の自主的な研究態度や関わりの工夫・改善について		6	4	1	
⑨実習を通じた実習生の成長について	2 (非常に見られた)	6 (見られた)	3		
⑩利用児・者や保護者への実習生の関わりの効果について		5 (よい影響)	5		
⑪実習受入で生じるスタッフの総合的負担の変化について		3 (増加)	2	7 (軽減)	

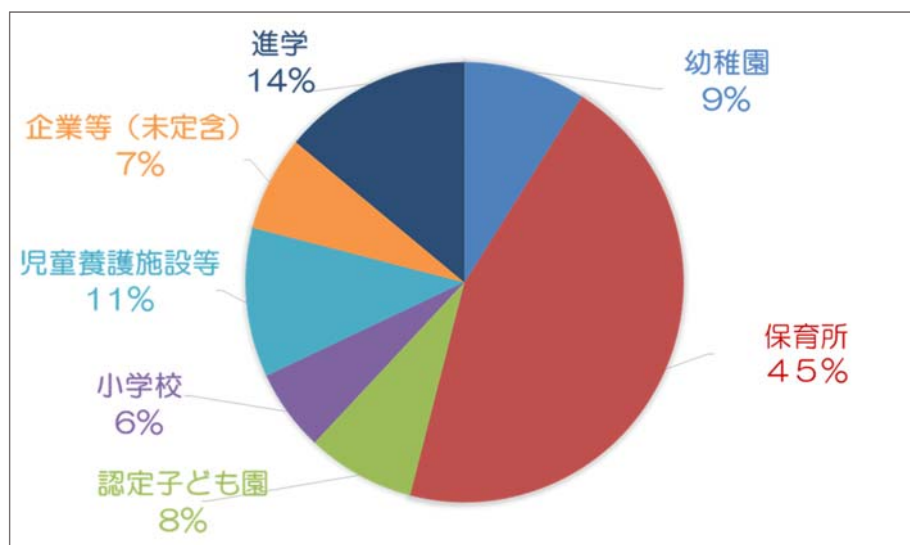


養成プログラムの流れ



基礎資格の認定

平成25年度 基礎資格認定者100名の進路状況



就職者の内、92%※が資格を活かせる職業に就いた

※進学者14名を除く86名の就職者の内、79名（92%）



基礎資格の認定

平成26年度 子ども発達支援士（基礎） 資格認定見込者数

大学名	資格認定見込者数
西九州大学	40名
九州龍谷短期大学	19名
佐賀女子短期大学	54名
西九州大学短期大学部	18名
合計	131名

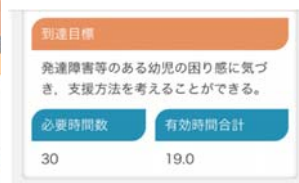
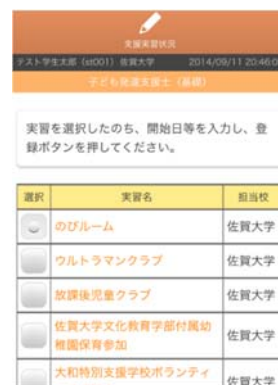
※佐賀大学は1、2年生が受講しているため、平成28年度から認定見込み



履修カルテシステムの開発



取組HPからログイン



新規追加

	実習名
	開始日～終了日
2013 年度	日の曜キッズ 6/1～6/1
2013 年度	子ども研究ネットワーク研究大会 6/1～6/1

平成26年度からスマホ対応

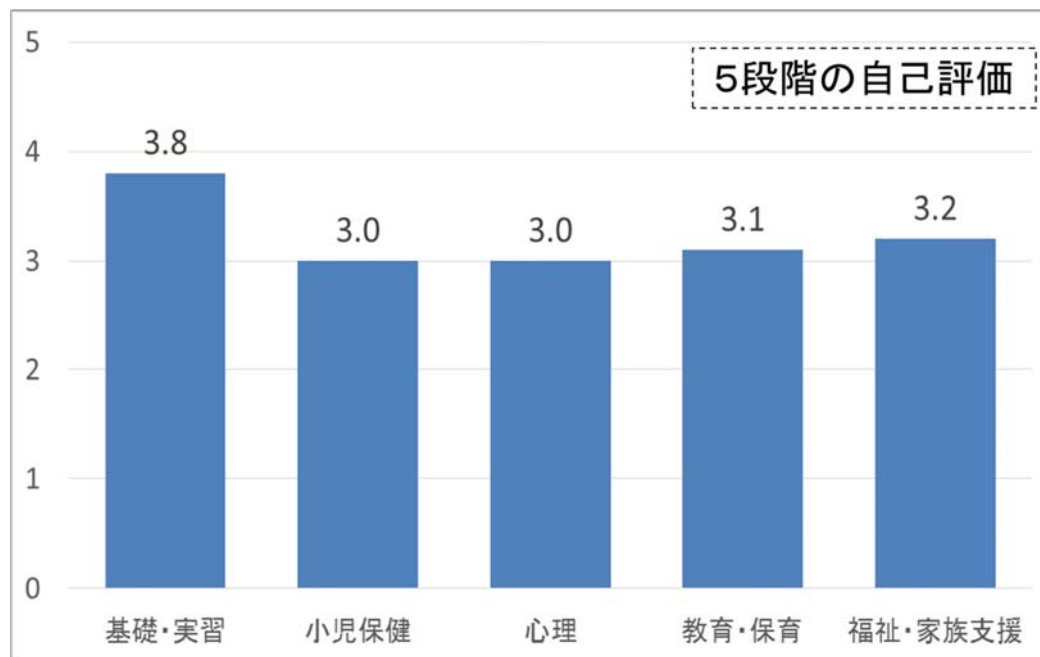
- ・ 実習記録、単位修得状況、自己評価を定期的に入力
 - ・ 学修状況の把握、学生指導や評価に活用
- ⇒養成プログラム・教育の質保証





履修カルテシステムによる「教育成果の検証」

平成25年度基礎資格認定者（ $n=100$ ）



学習到達度共通確認テスト

共通確認テストの目的と方法

1. テストの目的

この確認テストは、基礎資格の取得を目指す皆さんが、幼稚園や保育所等で子どもたちに接する時、皆さんに、是非知っておいて欲しいことや基本的に分かっている欲しいことを学習しているどうか、確かめるため実施します。

2. 解答上の注意

子どもの状況は1人ひとり異なっています。そこで、次の文章の下線部分が、原則的に、あるいは統計的に、正しいと思うものには○、間違っていると思うものには×を（ ）の中に書きなさい。

3. 試験終了後に資料配布

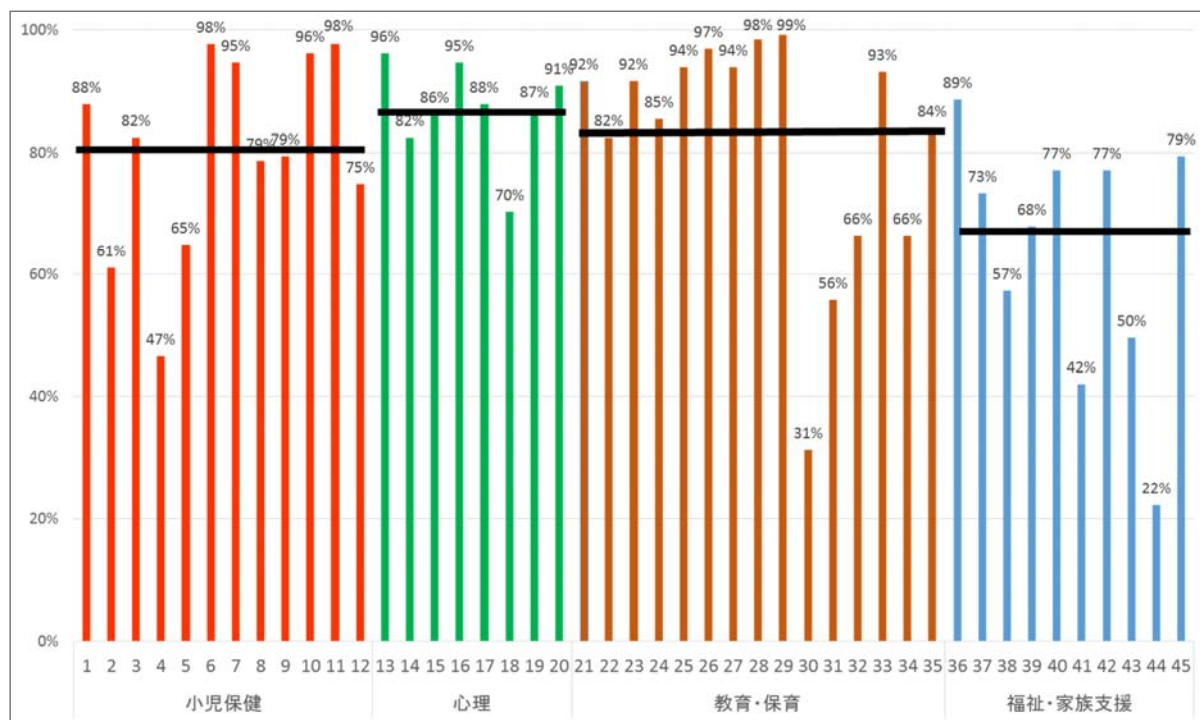
テスト終了後、正解の用紙を配布します。解説も載せていますので、よく読んで、実践に役立ててください。

【出題： 学生・現職教育ワーキング・グループ】



学習到達度共通確認テストの正答率

回答者 131名



(計45問)



学習到達度共通確認テストの抜粋

(問題30、31)

30	() 正答率 30%	注意欠陥多動性障害のある子どもが、滑り台の順番を守らないで、何度も割り込みをした場合、 <u>その度ごとに、列に並ぶよう注意すべきである。</u>	×	何度も割り込みをするのは衝動性の現れです。そこで、滑り台で遊びたいという気持ちを理解しながら、「後3人で滑れるよ！」などと声をかけ、見通しを持たせ、そして、待つことを指導する機会とすればよいと思います。
31	() 56%	注意欠陥多動性障害のある子どもが、授業中に手遊びなどしていたら、手遊びのもととなっている物を机の中にしまわせたり、預かったりして、 <u>手遊びをやめさせるようにするべき</u> である。	×	手遊びが、課題に集中するための自助行為である場合があります。また、無理に止めさせると、離席行為等別の行動をとる場合もあります。そこで対応方法は様々ありますが、例えば消しゴムで手遊びしていたら、消しゴムケースから消しゴムだけ出させて、ケースはしまわせる、学習に必要なものだけ机の上にその都度出させるなどが適切と思われる。



学習到達度共通確認テストの抜粋

(問題32、33、34)

32	() 正答率 66%	注意欠陥多動性障害のある子どもが、授業中に突然発言などして、授業の妨げとなっている場合は、 <u>その都度注意して、やめさせるようにするべき</u> である。	×	「静かにしておくこと」は難しいです。そこで、事前に指名することを伝えておいたり、役割を与えておいたりすると、見通しを持って、我慢することができるかもしれません。
33	() 93%	<u>教室の黒板周辺に授業と関係ない掲示物は貼らないようにし</u> 、注意欠陥多動性障害のある子どもが視覚的に気が散らないようにした方がよい。	○	(最近の状況) 小学校の教室では、従来、先生の机は、前方の黒板の左側(窓側)にありましたが、最近では、教室の一番後ろの窓側に置かれている教室が見られるようになりました。
34	() 66%	発達障害のある子どもが、例えば運動会などの集団活動に参加したくないと言え、 <u>それがその子のニーズなので、参加させなくてよい。</u>	×	教育的ニーズとは、教育に対してその子が求めていることです。または、その子の実態をよく理解したうえで、その子の成長・発達にとって保育者や教師が必要と思うことです。運動会という園や学校での行事にその子が求めることは何か、または、運動会への参加によってその子にどのような成長・発達を実現したいかを考える必要があります。「運動会に出たくないならそれでいいよ」では、子どもは寂しくなったり、見捨てられたという思いを持つかもしれません。



学習到達度共通確認テストの結果から

＊他分野よりもやや低い正答率（約60％）

「福祉・家族支援分野」の教育強化の必要性

＊正答率31％の問題（問30）

「よりそう力（応答性）」を高める
支援実習Ⅰの強化の必要性

→養成プログラムの見直しに活用

**学生プログラム**

⇒ 支援実習Ⅱ（2単位以上修得）

科目番号	開講大学等	科目名	単位数	開講形態	単位区分	備考
1	佐賀大学	臨床教育実習Ⅰ	1	実習	選択必修	2単位以上取得すること
2	佐賀大学	臨床教育実習Ⅱ	1	実習	選択必修	
3	佐賀大学	臨床教育演習	1	演習	選択必修	
4	西九州大学	カウンセリング演習Ⅲ	2	演習	選択必修	
5	西九州大学	子育て支援	2	演習	選択必修	

PDCAサイクルによる、継続的な支援実習

**卒後プログラム**

平成26年度 卒後研修・フォーラム開催一覧

担当大学	テーマ	講師名	開催日程	開催会場	その他
佐賀大学	A	附属特別支援学校 内田康芳	8月21日(木) 13時～17時	文化教育学部附属 特別支援学校	筆記用具、 動きやすい格好
西九州大学	A	西村喜文	9月14日(日) 13時～17時	西九州大学 神埼キャンパス	筆記用具
佐賀女子 短期大学	B	水田茂久 泉万里江	9月27日(土) 12時半～16時半	佐賀女子短期大学	筆記用具
九州龍谷 短期大学	B	鬼塚良太郎	9月6日(土) 13時～17時	九州龍谷短期大学	筆記用具
西九州大学 短期大学部	B	川邊浩史 菅原航平	8月9日(日) 13時～17時	西九州大学 神園キャンパス	筆記用具、 動きやすい格好
フォーラム		藤田一郎 園田貴章	平成27年2月28日(土) 13時～17時	佐賀大学	

テーマA:支援目標・仮説の立て方 テーマB:指導・保育記録のまとめ方



卒後研修の効果（一部）

佐賀大学 附属特別支援学校 平成26年8月21日

【卒後研修テーマA：支援目標と計画の策定】

- ・ 幼児の実態の把握
- ・ 個別の指導計画の作成
- ・ 受講生の記入と記入例の比較（一部）



幼児の実態を指導計画に反映させることが
重要であることを学習することが目的



卒後研修の効果（一部）

佐賀大学附属特別支援学校 平成26年8月実施

個別の指導計画—今年度の目標の立て方—

【受講生記入】

- ・ 興味を持ってできることを取り入れながら、順番を守ることの大切さを知っていく。
- ・ カードや言葉を使いながら自分の気持ちを相手に伝えることができるようになる。



木を見て森を見ていない

（全体の様子を見ながら、年中の幼児であることを踏まえた目標になっていない）。

【記入例】

- ①集団活動で本児がしたいことを尋ね、トラブルが起きないようにルールを先生が決める、本児がしたい遊びを他児と一緒にできるようになる。
- ②先生の手伝いがなくても、一人でシャツを脱ぎ着できるようになる。
- ③保護者と相談し、DVDを見る時間を30分間とし、早寝・早起きの習慣が身に付く。



卒後研修の効果（一部）

佐賀大学附属特別支援学校 平成26年8月実施

手だてと評価基準（一部抜粋）

【受講生】

場面	様子	手立て	評価基準	結果
給食・おやつ	給食を食べるのに時間がかかり、休み時間になっても、まだ一人で食べている。	時計カードを作り、できるようになるごとに褒め、針を早めていく。	・時間を見ながら食 べることができる。 ・みんなと一緒に完 食できるようになる。	

味覚の過敏性あり の情報が反映されてない

【記入例】

場面	様子	手立て	評価基準	結果
給食・おやつ	給食を食べるのに時間がかかり、休み時間になっても、まだ一人で食べている。	・小エビが口の中にある時の食感が嫌いなようなので、先生が、取り分けてあげる。 ・他の子どもたちと一緒に自分も食べ終えることができたという達成感が持てるようにする	・嫌な食感の食材を取り除くと、給食の時間中に食べ終わることができる。 ・一緒に「ごちそうさま」が言えた時、嬉しい表情が見られる。	



卒後研修の効果（一部）

西九州大学短期大学部 平成26年8月9日

【卒後研修テーマB：指導・保育記録のまとめ方】

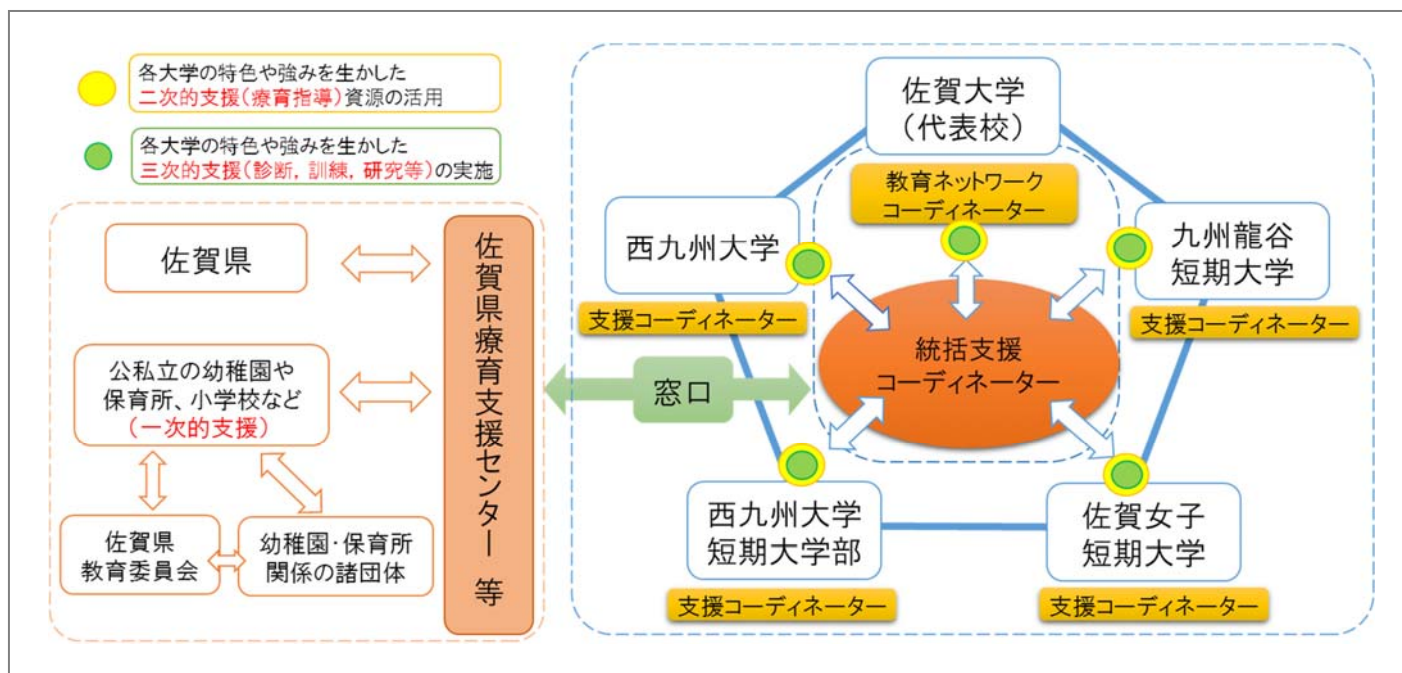
Aさん：架空事例の中で、自分の園にいる子どもに当てはまるものがたくさんあり参考になった。観察ポイントを絞ることで目標を立てやすくなるし、かかわり方も一貫性が保たれるので、今回の研修は園で活かせることを学べて良かった。

Bさん：講義では実際に現場で活用できる支援の仕方や保育者・支援者として大切な考え方を学べたので、気になる子へ今回学んだことを踏まえて関わりたいと思った。また、実際に障がいをもっている子どもと定型発達の子どもの同時に一緒にあそぶ中でその子の特徴やかかわる中でどこに注意すべきなのかを知ったり考えたりすることができた。

Cさん：実際に子どもの様子を見ることで、分かりやすく理解ができました。また、事例もわかりやすく、子どもの気持ちと大人の考え両方を出して説明して頂いたので、自分の保育園の子どもたちと比較できて、わかりやすかったです。



大学間発達障害支援ネットワーク



療育環境・実習指導環境の整備



支援実習Ⅰ
の場として活用

連携校における幼児・児童の受入れ数
平成25年度のべ550名、
平成26年度のべ560名（11月時点）



フォーラム・FD/SD研修の実施



フォーラム案内リーフレット



FD/ SD研修の様子



平成26年度フォーラム 2月28日（土）実施
「気になる子どもとその親に支援できること」



現職研修への協力

⇒ 要請を受けて実施

佐賀市公私立保育会との現職保育士対象の2年間（1年間4回）に亘る継続研修計画を作成・実施。

→メインテーマ「発達障害のある幼児の困り感と保育者の役割」として、第1回（6月）と第2回（9月）に、連携校教員を講師として派遣した。36名参加。

5月に佐賀市公私立保育会主任研修会（約40名参加），
6月に佐賀市私立保育園会中堅者研修（約40名参加）を実施。

今後の目標・展開

自治体や関係団体との共同企画・運営による
「養成・新任研修・現職研修」の
一貫的な教育を行う共同課程の構築



佐賀県内の幼稚園・保育所等を対象としたアンケート調査結果から

現職保育者が求める研修内容

全ての層(新採・中堅・ベテラン)の保育者に必要な研修内容

子どもと積極的に関わる。個人情報適切に扱う。同僚保育者と協働する。
発達障害の特性に関する知識。保護者対応。

経験の短い保育者に必要な研修内容

コミュニケーション。保育環境の構成。

経験の長い保育者に必要な研修内容

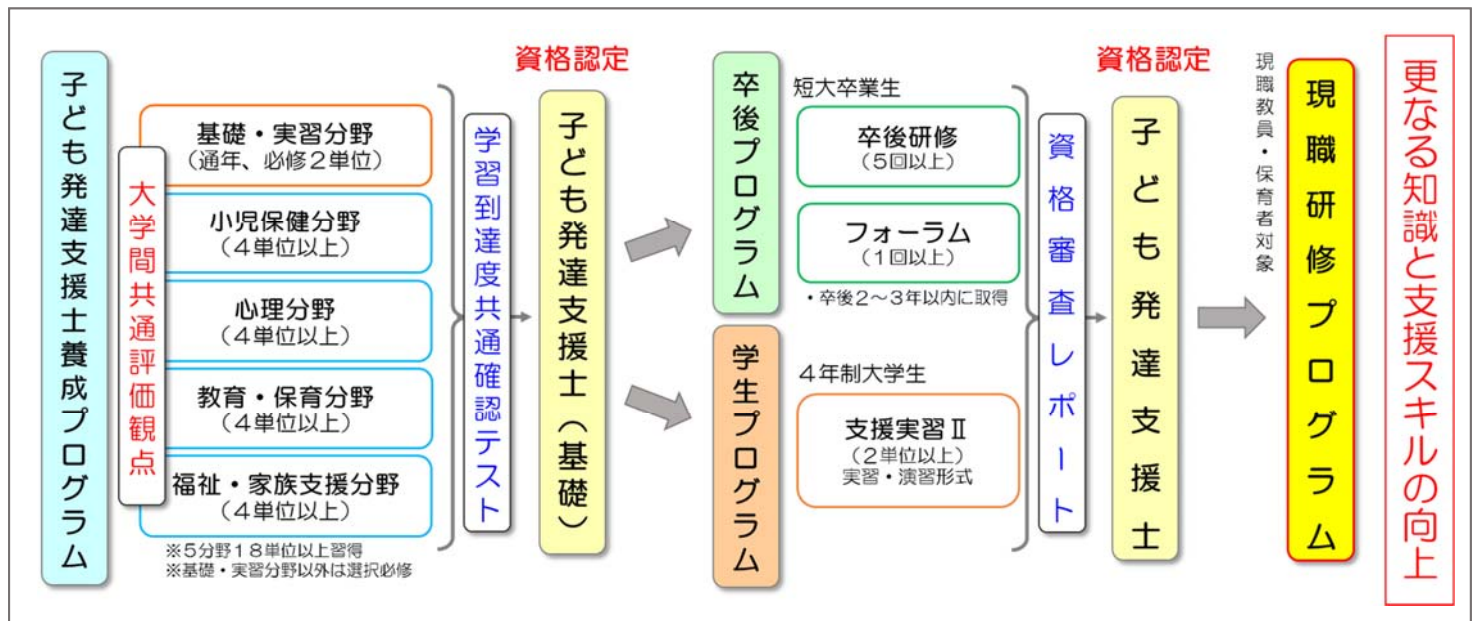
福祉制度に関する理解。周囲の子ども達に障害の理解や関わりを促す。

基礎的な知識に加えて必要な研修内容

支援・指導計画の作成。小学校や専門機関との連携。



一貫的な教育を行う共同課程の構築



⇒ 地域のニーズに対応した教育・研修活動の展開
⇒ 大学間から地域間に広がるネットワークを構築



お誘い

一般社団法人日本LD学会第24回大会（佐賀）

- 大会テーマ：学びの継続と共生社会ーアセスメントと学習支援を基盤としてー
- 開催大学：佐賀大学
- 平成27年10月11日（日）～12日（月、祝）
- 福岡国際会議場（福岡市）
- 詳しくは、「一般社団法人日本LD学会」のHP
- 当日、参加可能



ご清聴ありがとうございました。



【ロゴマークの主旨】

つないだ手は、「佐賀県内の大学・短大」、「連携機関」、「発達障害のある子どもとその保護者」の三者のつながりを表しています。三者が手を取り合い、つながり合いながら発達障害のある子どもをしっかりと包み込み、成長を見守っていこうという思いが込められています。同時に関係機関が手を取り合い、学生の幼保専門職業人としての学習や実践を保証し、心の育成を目指す意味も含まれています。